



〈本郷キャンパス〉
学校法人文京学園
文京学院大学経営学部・外国語学部・
保健医療技術学部／大学院／文京学院
大学生涯学習センター
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816
文京学院大学文京幼稚園
〒113-0023 東京都文京区向丘 2-4-1
☎幼 03-3813-3771

〈ふじみ野キャンパス〉
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部
／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806

〈駒込キャンパス〉
文京学院大学女子高等学校／文京学院
大学女子中学校
〒113-8667 文京区本駒込 6-18-3
☎03-3946-5301

大学 本郷キャンパス東本館

景観の美しさが表彰される

本郷キャンパス東本館が、「文の京 都市景観賞」で「景観創造賞」、さらに、環境色彩コンペティション「第18回グッド・ペインティング・カラー」で「最優秀賞」を受賞しました。

第15回文の京 都市景観賞「景観創造賞」

文京区では、景観に関する普及啓発活動の一環として、優れた景観づくりに貢献している建築物、道路、広告物などを広く一般の方々から募集し、「都市景観賞」として表彰しています。「第15回文の京 都市景観賞」では、過去最多の132件の応募があり、景観づくり審議会での審議の結果、本郷キャンパス東本館が、地域のまち並みにふさわしい景観を創造している建築物として「景観創造賞」を受賞しました。

1月22日、文京シビックセンターで表彰式が行われ、本学の島田昌和理事長が、成澤廣修区長より表彰状を授与されました。

島田理事長コメント「本郷キャンパス東本館は、2011年の東日本大震災後、『耐震性の強い校舎で、学生が安全に学べる空間を提供しなければならぬ』という決意のもと、90周年事業として計画したキャンパスリニューアルの完成第1号となった校舎です。歴史と伝統のある文京区にふさわしく、かつアーティ性を表現した外装にしたいと考え、煉瓦という素材や重量感を現代的な透かし積工法で再現しました。これは仁愛ホールの煉瓦貼りを発展的に継承したものです。近隣の方からよい評価を頂いておりますが、このような賞を頂き、文京区の景観形成に寄与できたことを改めて嬉しく思っております」



成澤区長より表彰される島田理事長(左)



「森」をイメージさせるイラストが描かれた東本館



「森の動物たち」の世界観を表わすイラスト

第18回グッド・ペインティング・カラー「最優秀賞」

グッド・ペインティング・カラー委員会(一般社団法人日本塗料工業会、日本塗料工業組合、一般社団法人日本塗装工業会)が主催する「第18回グッド・ペインティング・カラー」で、本郷キャンパス東本館が新築部門において「最優秀賞」を受賞しました。授賞式は1月6日、ホテルニューオータニで行われました。

東本館は、建築の設計施工を株式会社竹中工務店が担当し、日本給食設備株式会社が北西に面した壁一面に、「森」をテーマにしたイラストをデザインしました。

中田幸夫施設担当部長コメント「この賞は、経済産業省、国土交通省の後援や(社)日本建築学会等各種団体の協賛を受ける権威あるコンペティションです。審査講評では、街並みに対する調和と構内の活気表現の二つの方向性をうまく調和した設計と評価されています。本郷通り沿いの文京幼稚園のエントランス広場では、園児や保護者が親しみを感ぜられるような森の動物たちの世界観をペイントにより創り出しています。幼稚園内部では、白を基調に、淡いパステル色の塗装と優しい色合いの木彫を組み合わせ、明るい雰囲気演出しています。大学キャンパスでは、文京カラーから抽出した大学らしい色彩をアクセントカラーとして使用し、機能や場所ごとのカラーリングや、サインと一体化も試みています。東キャンパスの色彩豊かな空間をお楽しみください」

中高 「富士賞」授与式厳かに

第51回「富士賞」授与式が2月13日、ジャシーホールで執り行われました。これは、文京学院創立者の島田依史子先生の誕生月に、勉学・部活動・生徒会・ボランティアなど地道な努力を継続し、成果を収めた生徒・保護者・卒業生・教員を表彰するものです。

島田輝子学園長が、全校生徒の模範となるこれら受賞者の代表に表彰状を授与し、挨拶で労いと称賛の言葉を贈りました。特別ゲストとして、昭和17年度卒業生の鈴木静枝さんが登壇し、90歳とは思えないパワフルさで、約40分のスピーチをされました。



90歳の特別ゲスト・鈴木さん



島田学園長(右)による「富士賞」授与の様子

2面へ続く

人間福祉学科
准教授



中島 修

人々を幸せにする誇りある福祉の仕事

福祉の仕事は、大変な仕事である。私が大学生になるときは、福祉の大学へ行くと言うと、変な人のように見られた。バブル経済の絶頂期だった。

少子高齢化の今日、福祉のニュースは新聞やテレビ・ラジオを毎日のように賑わせている。この私が新聞やラジオに呼ばれるのだから、本当に福祉はなくてはならないものとなってきているのである。

しかし、福祉の人材が足りない。現場は深刻な状況である。東日本大震災の被災地では、施設を建てたくても、働く職員がいなくて施設が運営できず、建設が先延ばしにされている。首都圏では、保育士が不足し、待機児童ゼロを目指すというにもかわらぬ。園の建設がうまく進まない地域がある。

元々、福祉の仕事は人気のあるものではなかった。しかし、その役割の重さ、社会的使命に基づいて多くの先輩たちが福祉サービスを作り、道を切り開いてきた。多くの困難を抱えた人々を救い、人々の幸せを築いてきたのである。この誇り高い仕事を、学問を改めて魅力あるものとして語り継いでいきたい。学生の諸君に聞きたい。なぜソーシャルワーカーを目指したのか。そこには、誇り高い使命感があったのではないか。介護、子育て、貧困、虐待、ひきこもり等若者も含めた生活支援が求められている。そこには、まちづくり、地域づくりの視点が不可欠である。人々の日々の生活は地域にある。その暮らしを豊かにしていくことが我々の仕事である。地域をデザインしていく魅力的な仕事を地域福祉は担っているのである。

本学には、福祉以外にも人間学部、保健医療技術学部として、人々を幸せにするための学びをしている学生たちがいる。文京学院大学の魅力である。この誇り高い学びをしてくれる我々を、多くの人々が現場で待っている。施設を運営している社会福祉法人は、社会福祉法改正による社会福祉法人改革のなかで地域公益活動として地域の課題に取り組みしている。しかし、人材が足りない。人々を幸せにする仕事である。そこを福祉の仕事の魅力である。それが誇りである。

Green Spirits

福祉の仕事は、大変な仕事である。私が大学生になるときは、福祉の大学へ行くと言うと、変な人のように見られた。バブル経済の絶頂期だった。

少子高齢化の今日、福祉のニュースは新聞やテレビ・ラジオを毎日のように賑わせている。この私が新聞やラジオに呼ばれるのだから、本当に福祉はなくてはならないものとなってきているのである。

しかし、福祉の人材が足りない。現場は深刻な状況である。東日本大震災の被災地では、施設を建てたくても、働く職員がいなくて施設が運営できず、建設が先延ばしにされている。首都圏では、保育士が不足し、待機児童ゼロを目指すというにもかわらぬ。園の建設がうまく進まない地域がある。

元々、福祉の仕事は人気のあるものではなかった。しかし、その役割の重さ、社会的使命に基づいて多くの先輩たちが福祉サービスを作り、道を切り開いてきた。多くの困難を抱えた人々を救い、人々の幸せを築いてきたのである。この誇り高い仕事を、学問を改めて魅力あるものとして語り継いでいきたい。学生の諸君に聞きたい。なぜソーシャルワーカーを目指したのか。そこには、誇り高い使命感があったのではないか。介護、子育て、貧困、虐待、ひきこもり等若者も含めた生活支援が求められている。そこには、まちづくり、地域づくりの視点が不可欠である。人々の日々の生活は地域にある。その暮らしを豊かにしていくことが我々の仕事である。地域をデザインしていく魅力的な仕事を地域福祉は担っているのである。

本学には、福祉以外にも人間学部、保健医療技術学部として、人々を幸せにするための学びをしている学生たちがいる。文京学院大学の魅力である。この誇り高い学びをしてくれる我々を、多くの人々が現場で待っている。施設を運営している社会福祉法人は、社会福祉法改正による社会福祉法人改革のなかで地域公益活動として地域の課題に取り組みしている。しかし、人材が足りない。人々を幸せにする仕事である。そこを福祉の仕事の魅力である。それが誇りである。

高校 SSH×SGH アンシエイト

「探求型カリキュラム」を学ぶ

本校は、文部科学省から「スーパーサイエンスハイスクール (SSH)」と「スーパーグローバルハイスクール (SGH) アンシエイト」に指定されています。本校では、SSHとSGHが協働し合いながら研究を進めています。

SSH×SGH アンシエイト「アクティブラーニングの実践による課題研究の展開」をテーマに2月13日、B1-Studioで「公開授業」と「探求型カリキュラム」を考える懇話会が開かれました。東京・新潟・長野・栃木・埼玉・神奈川・愛知・滋賀・京都・大阪・兵庫・岡山・香川・熊本の小学校から大学までの教員総勢50名が参加し、大規模な会となりました。



高野教授(右)と樋口教授によるアクティブラーニング

公開授業では、高1のSSH設定科目である「学際科学・SS数理演習」として、東京有明医療大学の高野一夫特任教授が、「平熱とは何か? 協働学習で探る体温調節のしくみ」をテーマに、本学保健医療技術学部の樋口桂教授と共に授業を展開しました。

この授業は、自分の体温を題材として、客観的に見直し、体温調節の仕組みを多面的に分析する活動を通して、具体的に「熱に関連する事前テスト」「体温を測る実験」「体温計測の結果まとめ」「体温計測からわかることの意味」「体の中で熱を出す仕組みを考える」などの講座を事前に受けた生徒たちは、当日、マインドマップで「平熱とは何か? 発熱とは何かを考える」ことにチャレンジ。高野特任教授と樋口教授の講義を聞いて思考活動を繰り返した生徒たちは、体の中で起こる基礎的な代謝(同化・異化)について、「代謝とは生体内での化学反応」「エネルギー源とは栄養素」「エ



大学 国際連携教育プログラム

留学生21名喜びの修了式

「国際連携教育プログラム修了式」が昨年12月11日、サロン・ド・フンキョウで行われました。

島田昌和理事長、島田輝子学園長をはじめ関係者が列席のもと、工藤秀機学長は本学で学んだ5カ国21名の留学生に労いの言葉とエールを贈り、エネルギーを得る代謝(異化)「体の成長に必要な分子を合成する過程は同化で、細かな材料を結合させるためにはエネルギーが消費されている」などを理解しました。



関係者に見守られて修了証書を授与された留学生

「日本で働くために必ず戻ってくる!」と強い決意を述べました。校友会の大石理栄子会長からも、お祝いの言葉が英語で贈られました。外国語学部・短期大学同窓会の森田喜代子相談役は、森山直美同会長代理として記念品を贈呈しました。

なお、修了式の午前中、留学生たちはスカイホールにおいて交換留学生日本語発表会を開催。本学でさらに磨いた日本語力をフルに発揮し、スピーチあり、大学の授業を模した寸劇ありの大盛り上がりとなりました。

大学 外国語学部1年生 273名が地域で学習

外国語学部では、初年次教育カリキュラムの柱となる「大学入門・活用法」で、地域連携型の学習プログラムを取り入れています。前期には、ノートの取り方、文献の読み方、レポートの書き方などを習得。レポートでは、「日本文化を外国人に説明する」という課題に取り組みました。



フィールドワークの成果を発表する学生たち

昨年10月28日には、前期で学んだ知識やスキルを活用して、外国語学部1年生273名がグループに分かれ「良いお店ガイドとは

「?」を課題に、「外国人に對してアピールできるものは何か」という視点を含めて、文京区内の本屋さん、肉屋さん、惣菜屋さんなど47店舗へインタビューしました。これを基に、日本

語・英語で学生が作成したお店ガイドについて留学生と英語で意見交換。今後、改善版を各店舗に設置予定です。同フィールドワークには、「チームで課題を発見し、調査した結果を発表する力を身につける」目的があり、学生たちは精力的に取り組みました。

12月9日、同フィールドワークの成果を発表する催しが本郷キャンパスで開催。各教室では学生がグループ単位で担当した店舗の現状、提案、感想などをプレゼンテーションしながら、実際に作成したお店ガイドを披露しました。どのガイドも創意工夫があり、慣れないプレゼンテーションを一生懸命にこなしながら、お世話になった店舗への感謝の気持ちを表す姿に、本学の初年次教育の成果を垣間見ることができました。

「日本を動かすために必ず戻ってくる!」と強い決意を述べました。校友会の大石理栄子会長からも、お祝いの言葉が英語で贈られました。外国語学部・短期大学同窓会の森田喜代子相談役は、森山直美同会長代理として記念品を贈呈しました。

また、12月4日には、本郷キャンパスで開かれた「交換留学生パネル・ディスカッション」(国際連携教育プログラム委員会・瀧浦ゼミ共催)に参加。Dr. Jui-Ben Chen 名誉教授(セント・ベネディクト/セント・ジョンズ大学)と瀧浦裕教授の司会により、代表の留学生たちが同プログラムを通じて学んだこと、母国と日本の習慣の違い、今後の抱負などについて活発に意見交換。同プログラムを総括することにより、自分たちの学びの成果を確認し合いました。

今後、同プログラムを履修した学生たちが、母国で活躍することが期待されます。

大学 環境教育研究センター 学生が学外でも大活躍

エコプロダクツ2015

環境教育研究センターの学生たちが次々と地域に出て大活躍しています。

東京ビッグサイトで開催された「エコプロダクツ2015」が開かれ、「わたしが選ぶクールな未来」をテーマに約700社・団体が出展。3日間で16万9118名が来場する大イベントとなりました。

本学・環境教育研究センターの学生たちもブースを構え、日頃の活動についてパネル発表。参加6回目となる今回は、壁面への展示の他、巨大な木のモニュメントに同センターの活動について展示したことで、来場者の注目を浴びました。さらに、そこにクイズを貼り付け、展示のどこかを見れば答えがわかるように工夫。参加者には、ゾウのフンで作った「ぞうさんペーパー」のしおりをプレゼントし、驚かされると同時に喜ばれました。来場者からは「学生による活動の幅広さ、内容に驚いた。素晴らしい!」「クイズがわかりやすく楽しかった」など多くの感想が寄せられました。



木のモニュメント前で学ぶ子どもたち

同イベントの学生代表・小林智哉さん(コミュニケーション3年)は、「タスクの制作は結構大変でしたが、子どもたちが大喜びでくれて、参加者にゴミの分別に対する意識を高めてもらえたことが良かった。夕方まで暗く、何の活動をしているのかかわりにくかったため、次年度の課題として後輩に引き継ぎたい」と感想と抱負を述べました。

なお、この活動は12月25日付「埼玉新聞」に掲載されました。

「日本を動かすために必ず戻ってくる!」と強い決意を述べました。校友会の大石理栄子会長からも、お祝いの言葉が英語で贈られました。外国語学部・短期大学同窓会の森田喜代子相談役は、森山直美同会長代理として記念品を贈呈しました。

また、12月4日には、本郷キャンパスで開かれた「交換留学生パネル・ディスカッション」(国際連携教育プログラム委員会・瀧浦ゼミ共催)に参加。Dr. Jui-Ben Chen 名誉教授(セント・ベネディクト/セント・ジョンズ大学)と瀧浦裕教授の司会により、代表の留学生たちが同プログラムを通じて学んだこと、母国と日本の習慣の違い、今後の抱負などについて活発に意見交換。同プログラムを総括することにより、自分たちの学びの成果を確認し合いました。

今後、同プログラムを履修した学生たちが、母国で活躍することが期待されます。

【お知らせ】 本学園は11月17日、日本赤十字社から『金色有功章』を授与されました。



日本赤十字社から贈られた盾